Title	琴と韻：姜夔の文芸、その理論と実践と継承について
Sub Title	Ch'in (琴) and Yün (韻) : theory, practice and transmission of 姜夔 (Chiang K'ui)'s literary art
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.9 (2016.) ,p.1- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20160331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

琴と韻

——姜夔の文芸、その理論と実践と継承について

村越 貴代美

はじめに

一琴一硯一蘭亭。

南宋の詞人、姜夔（字は堯章、号は白石道人。一一五五～一二〇八^①）が貧窮のうちに亡くなり、弔うお金もなかったため、友人らの援助で杭州西湖の東岸、馬塍に埋葬された。明・田汝成『西湖遊覧志』巻二十二によれば、銭塘門を出て溜水橋の北に、川を境に東西馬塍がある。かつて銭王がここで馬を三万頭も飼っていたところで、周辺の土質がきめ細かく、木の生長によいとして、宋代のころには花の産地となり、いつも鶯が花のあいだで啼いていたことから、この辺りを「花圃啼鶯」と呼ぶようになった。「花圃啼鶯」は、明の王布範が西湖湖畔を「湖墅八

景」とした、美しい景色の一。現在も杭州市に馬塍路という通りがある。

姜夔の訃報を聞いた蘇洞は慟哭し、馬塍を訪れ、挽詩「至馬塍哭堯章（馬塍に至り堯章を哭す）」を作った。

除却楽書誰殉葬、 楽書を除却して誰か殉葬せん、

一琴一硯一蘭亭。 一琴 一硯 一蘭亭。

蘇洞（一一七〇〜？）、字は召叟、山陰（浙江省紹興）の人。『冷然齋集』十二卷、『冷然齋詩余』一卷があったが、散逸した。詩を陸游に学び、姜夔のほか、辛棄疾・劉過・王柁・潘檉・趙師秀・周文璞・葛天民らと唱和の作がある。

「至馬塍哭堯章」の詩句では、

頼是小紅渠已嫁、 頼さいわいに是れ小紅 渠それ已に嫁ぐ、
不然啼碎馬塍花。 然らざれば啼いて碎けん 馬塍の花。

のほうで、有名かも知れない。小紅は、もと范成大の侍女。歌が上手く、姜夔が范成大のもとを訪ねたときに「暗香」「疏影」の二首を作詞作曲したが、小紅に習わせたところ歌声がみごとだったので、范成大は小紅を姜夔に贈った。姜夔は「過垂虹（垂虹を過る）」詩で、

自作新詞韻最嬌、
自ら新詞を作り韻は最も嬌たり、
小紅低唱我吹簫。 小紅 低く唱い 我 簫を吹く。

と、この出来事を詠んでいる。范成大から贈られた小紅を、姜夔は亡くなる前にしかるべき相手に嫁がせていた。蘇洵は姜夔と交遊する中で小紅とも会っており、ともに歌を楽しんだのであろう。

蘇洵は「至馬塍哭堯章」詩でまた、

今日親来見靈柩、 今日親しく来りて靈柩を見、
对君妻子但如癡。 君の妻子の但だ癡の如きに対す。

とも詠っているが、姜夔は三十歳を過ぎた頃、蕭德藻（生卒年不詳、紹興二十一年₁₁₅₁年₁₁₅₁の進士。字は東夫、号は千巖老人）の知遇を得て、その姪（兄の娘）を妻にもらい受けた。子は、瓊（のちに太廟太郎となった）と瑛（のちに嘉禾郡簽判となった）があり、姜夔の卒後ずいぶんたってから、姜夔が生前みずから編纂に加わったと思われる『白石道人歌曲』六卷が瑛に渡され、それが今日、我々が見ることのできるテキストへとつながっていく。^②姜夔が亡くなった時、子はまだ十代。挽詩「至馬塍哭堯章」に、

兪年十七未更事、 兪 年十七 未だ更事せず、
曷日文章能世家。 曷れの日にか文章 能く世家たらん。

とあるのは、瓊か瑛か。

蘇洞は姜夔の少なくとも晩年を、家族ぐるみでもとに過⁽³⁾ごした。姜夔は百人を越える人々と交遊があったことが知られているが、辛棄疾・劉過・葛天民・潘檉・周文璞など、そのうちの何人かは、蘇洞が交際していた人々とも重なる。

姜夔の詩は、臨安（杭州）の書坊の陳起（生卒年不詳。孝宗淳熙年間から理宗淳祐末年の人。字は宗之、彦木、号は芸居、陳道人、陳解元）が刊行した「江湖集」に、『白石道人詩集』一卷として収められている。⁽⁴⁾このことから、姜夔を「江湖派」とする見方もある。

江湖派と称される南宋の一群の詩人とその作品については最近、内山精也編『南宋江湖の詩人たち 中国近世文学の夜明け』（勉強出版、二〇一五年）が出され、そこにも紹介されているように張宏生『江湖詩派研究』（中華書局、一九九五年）が先行研究としてあり、さらには張宏生氏が指摘しているように、こうした詩人群について最初にまとめた言及をしたのは、宋末元初の方回『瀛奎律髓』であった。方回は云う、⁽⁵⁾

江湖遊士、多以星命相卜、挾中朝尺書、奔走閩台郡県糊口耳。

江湖の遊士は、その多くが占いで生計をたて、中央高官から手紙をもらい、地方長官の役所を奔走して、口を糊していた。

これは、『瀛奎律髓』巻二十で戴復古の「寄尋梅」詩に注した評語。「江湖の遊士」が高位高官に謁見を求めて詩を贈ると引き換えに、時に多額の金銭を受け取る状況を指摘するとともに、戴復古について、

早年不甚讀書、中年以詩遊諸公間、頗有聲。寿至八十余、以詩為生涯而成家。……錢塘湖山此曹什伯為群、阮梅峰秀実、林可山洪、孫花翁季蕃、高菊圃九万、往往雌黃士大夫、口吻可畏、至於望門倒屣。石屏為人、則否。每於広座中、口不談世事、縉紳多之。

若い頃はあまり讀書をせず、中年になつて詩で諸公の間を渡り歩き、とても名声があつた。寿命は八十を超えたが、詩で生涯を送り一家となつた。……錢塘の湖山にこうした人々が數十人、数百人と群をなし、阮秀実（号は梅峰）、林洪（号は可山）、孫惟信（字は季蕃、号は花翁）、高翥（字は九万、号は菊圃）などは、しばしば士大夫を批評し、おそるべき口吻で、名門の人々は大歓迎である。だが石屏（載復古の号）の人となりは違つていて、いつも大勢の席にいても世事には口を挟まなかつたので、地方の名士はこれを称賛した。

という。「詩を以て諸公の間に遊ぶ」「詩を以て生涯を為す」、すなわち詩を切り売りして生活の糧とする「江湖の遊士」がいて、彼らはしばしば「士大夫」を批判し、それを聞きたがる「望門」の人々がいた。ここに凶らずも、本稿で論じようとしている階層の人々がそろつて登場する。

姜夔が生涯無官で、各地を転々としながら高官貴人の援助を得て暮らしていたことは確かであり、南宋になつて誕生した新しいタイプの「專業的文人」であるとも、「江湖派」あるいは「江湖詩人」とも呼べるのである。方が苦々しげに「瀧州劉過改之の徒は一人ならず」と批判した劉過（字は改之）とも姜夔は交遊があり、劉過の「雨寒寄姜堯章」詩が残されている（『瀧州集』卷三）。

だが方が姜夔を取り上げて批判したこともなく、また張宏生氏も姜夔を江湖派とすることに慎重で、姜夔は「江湖詩派の前人の一人であり、その詩歌の創作は、全体的な風格について言えば、江湖詩派のもう一人の前人で

ある劉過とはまったく異なる」という。張宏生『江湖詩派研究』の第七章「江湖詩品」中に姜夔の詩を取り上げ、「姜夔の作品が当時の詩壇で独創的だったのは、なにより表現に深遠なる風韻があったからである」「いわゆる風韻とは、作者独自の芸術的構想が特定の言語形式によって伝達された、奥深く豊かな美しさである」といい、姜夔の詩論「白石道人詩説」中に「韻度は其の飄逸を欲す」とあることも指摘する。⁷¹

姜夔の詩論では、「氣象」「体面」「血脈」「韻度」の四つの要素が論じられており、とりわけ「韻度」については、袁向彤『姜夔与宋韻研究』（齊魯書社、二〇〇七年）など専著も出て、近年、宋詞と「韻」に関する研究が進んだ。「韻」はもともと、琴の描写に多く使われていたが、次第に人物や書画の批評、宋代になってからは詩の批評にも、使われるようになった。⁷²

姜夔の詩については、中原健二氏の主催する曉風残月会が二〇〇五年より輪読会を行い、訳注稿を発表してきた（『中国言語文化研究』第七号〜第十四号、佛敎大学中国言語文化研究会、二〇〇七〜二〇一四年）。全詩の訳注作業を終えて中原氏は、「姜白石訳注稿後記」で次のように述べている。⁷³

白石の詞が極めて高く評価されてきたのには言うまでもない。ところが詩の方は文学史上で江湖派の一角を占めるに過ぎない。また、筆者自身の白石詩に対する評価が、訳注を終えて従来と大きく変わったということもない。ただ、いささか奇妙だが、白石はその詩よりもその詞の方に、士大夫としての硬質性が表れているように思える。筆者は、白石の詞は宋詞を集大成した周邦彦の詞とは異質だとずっと感じてきた。それはあるいは、芸術的才能に恵まれる一方で、生涯を布衣で過ごさざるを得なかったという白石自身の閱歴に関連しているのではなからうか。つまり、官途に就けなかったがゆえに、その詩はあくまで「江湖派」であり、余技のはずの

詞の方に、かえって「士大夫性」が表れているということである。

ここでも「江湖派」と「士大夫」が異なる階層として対峙している。

本稿では、まず詞における士大夫とは何かを考察する。その上で、無官の文人として生活の援助を受けながら創作活動を続け、最後には楽書のほかに「一琴一硯一蘭亭」が残ったという姜夔の生涯を追い、姜夔において体現された一人の文人として統合された人格について、論じたい。

一、士大夫と江湖

詞の起源は、隋唐の燕楽とされる。燕楽とは宮廷音楽の一種であり、祭祀で使用される雅楽に対して、祭祀の儀式が終了した後や皇族の誕生日、外国の使者をもてなす宴会などで使用される、饗宴の音楽である。使用される場面が饗宴であるから、燕楽には中国古来の音楽に加えて、外国から輸入された音楽（新しい楽器や曲を含む）も積極的に演奏され、さらに歌のみならず踊りもある。演奏（歌や踊りを含む）の担い手は楽人（楽工）や妓女（宮女）で、数百人の大規模な編成の曲から、数人の小規模なものまであった。

とくに唐の玄宗の時代には、宮中に梨園を設置し、楽人を選び、比較的小規模な曲を演奏させて楽しんだ。その様子を描いたとされる周文矩「合楽図」が、シカゴ大学美術館に所蔵される。また少し時代を下って南唐の貴族の宴会シーンを描いた「韓熙載夜宴図」が、北京や台北の故宮博物院に所蔵される。この二点の画は、主人の座る位置が左右違うけれども、主人の容貌はたいへんよく似ていて、二点とも楽人の演奏を聴くシーンが描かれてい

る。「韓熙載夜宴圖」のほうは場面が複数あり、主人が太鼓を叩き客が拍板（カスターネットのような楽器）を鳴らして、演奏に参加しているシーンも描かれている¹⁰。

詞はこうした音楽環境の中で発展したが、いわゆる士大夫は音楽を享受する側であって、たまに太鼓や拍板を打つ程度の参加はしても、基本的には演奏の担い手は楽人や妓女であり、士大夫がたしなむべき楽器は古代より一貫して琴であった¹¹。燕楽や燕楽から発展した詞楽の演奏場面とは違い、琴を奏するのは自分一人のとき、もしくは己を理解してくれるごく少数の友人、いわゆる「知音」の前に限られる。たとえば北宋の徽宗が琴を弾いている様子を描写した「聴琴圖」がそうであり、また徽宗を主人としたお茶会を描いた「文会圖」でも、後方の木陰に琴がひっそりと置いてあり、琴は文人の集いによく登場するアイテムであった。

士大夫や文人は曲の歌辞である詞を作るのであって、楽器を演奏したり歌い踊ったりするのは楽人や妓女である。楽人や妓女が詞を作ることもまた、ない。両者はかなり厳格に棲み分けられており、それは社会的階層の違いがそのまま反映されたものである。

ここで「士大夫」と「文人」について、整理しておこう。

村上哲見氏の「文人・士大夫・読書人」によれば、「中国における伝統的な知識人の類型を成立させている要件として次の三つの柱が考えられる」という。AⅡ人文的教養（古典の素養と作詩文の能力）、BⅡ「知国平天下」の使命感（官僚として活動すること）、CⅡ「尚雅の精神（作詩文のみならず書画音楽などの芸術に秀でること）の三つで、Aは「読書人」の成立要件、「士大夫」はAとBを備えているもの、「文人」はAとCを備えているもの。北宋時代はABC兼ね備えた蘇軾のような「官僚文人」がいて、南宋時代にも同じタイプの人がいるが全く異なるタイプの人々も登場した。

一例として姜夔についていえば、当時すでに詩人として知られていたばかりでなく、詞においては南宋隨一の名声があり、それと関連するが、音楽に通じてみずから作曲もし、宮廷音楽についての意見書（「大樂議」）を献上したりしている。更に書家、書論家として知られ、詩集・詞集のほかに、詩論・音楽論・書論・法帖研究などの著述を残している。しかし官途に全く関心がなかったわけではないが、けつきよく官職とはいっさい無縁で、もっぱら風雅の名士として生涯を送った。

無官の詩人という点では、北宋でも林逋（林和靖）のような人がいるが、これは世間と交わりを絶った、いわゆる隱者の系列に属する人で、それに比べると姜夔以下さきに挙げた人々は、概ね皇族や高級官僚などと交際し、いわば社交界の花形のような存在だったらしいので、いわゆる「隱者」とはまったく違った人間類型と考えねばならない。

けつきよくこれらの人々こそは、理念的に求められる「文人」なるものを、もつとも純粹なかたちで、もつともよく具現した人々であり、ここにいうところの「文人」の典型としてよい。

詞はもともと饗宴の場があり、饗宴の音楽があり、そこで演奏される曲につけられた歌辞から発展したため、北宋の時代になっても詞を制作・享受する場面は宴席が多かったけれども、そこへ「士大夫」たるべき要素を持った人々が歌辞の作者として参加するようになった。「詩を以て詞を作る」と評された蘇軾や、「賦を以て詞を作る」と評された周邦彦が現れ、詞にうたう内容を拡大し、表現を豊かにした。柳永のように花柳界に入り浸って遊んでいる人でも科擧を受験しており、結果はともかく、志としては「知国平天下」の使命感を持ち合わせていた、あるいは持たなくてははいけないと考えられていたと思われる。

職位の高低はあれども官僚であることが、士大夫としての理念を実現し、同時に文人としての理想を追求することを担保しており、北宋の時代はそうした「官僚文人」が詞の主な作者となった。

一方、「知国平天下」の使命感があったとしても、それを実践する担保を持っていないのが、「江湖の遊士」である。これを、無位無官であるとか下級官僚であると言うことはできても、「下層の士大夫」「下級士大夫¹³」と言ってよいのかは、いささか疑問が残る。官僚としての地位が低い（または無い）ことが、そのまま文学者としても評価が低いことにつながるのかどうか。「士大夫」が、古代封建制度時代の身分階層としての「士」「大夫」ではなく、中央集権的官僚制における官僚が持つべき理念（「知国平天下」の使命感を持つていること）であるならば、理念に対して上層下層、上級下級というレベル分けはふさわしくないように思われる。「知国平天下」の使命感があったかどうかと、それを実現できる職位にあったかどうかは、本来は違うのではないか。

ふりかえって方は、「江湖遊士」と「士大夫」を対比させて当時の詩人の状況を述べていたのであって、「士」の中に官職を持たない「遊士」と（比較的上級の）官職を持つ「士大夫」がいて、さらに代々官僚を輩出して安定した地位のある「望門」もあったのであろう。

南宋の当時、「江湖遊士」が大量に出現した背景については、金の侵攻による宋室の南渡、先祖伝来の土地を失って一緒に南渡した人々が江南地区に集中したこと、書院の発達もあって教育水準は高く、科挙制度改革により受験者と合格者が増大したが、それに伴って冗官（余剰な官職）も増えていたこと、通貨膨張によるインフレで生活水準が下がったこと、などいくつかの要因がある¹⁴。南宋四大家の一人とされる陸游でさえ、二十九歳で科挙の解試（両浙路漕試）を首席で合格したが、これが当時権勢をふるっていた秦檜の孫の秦垕を差し置いたとして、省試で不合格にされるといふ妨害を受け、秦檜が亡くなって後、三十四歳で福州寧徳県（福建省寧徳市）主簿として出仕

したのが、官僚生活のスタートであった。陸游は越州山陰（浙江省紹興）の人、先祖伝来の土地もあり、占いで生計を立てるようなことはする必要がなかったが、陸游といえば主戦派の愛国詩人として名高く、官界で不遇だったことを以て下流や下層の士大夫と評する人もいないだろう。方回が戴復古について「石屏の人と為りは、則ち否らず」と述べたように、結局はその人の志がどのようであったか、個別に判断すべきであり、判断の拠り所となるのは作品である。

姜夔について言えば、「官途に全く関心がなかったわけではないが、けっきょく官職とはいっさい無縁」だったというのは、慶元三年（一一九七）、四十三歳の時に『大楽議』一卷、『琴瑟考古図』一卷を上書するが採用されず、慶元五年（一一九九）、四十五歳の時に「聖宋鏡歌鼓吹曲」十四章を作り、献上して「免解」（解試免除）となり礼部試に応じたが及第しなかったことを指す。科挙を何度も受験して落ちていた形跡はないので、姜夔が仕官に熱心だったとは言えないだろうし、実際、何らかの官職についたわけではなかった。だが宋代、官途につくルートは科挙以外にもけっこうあって、嘉定六年（一一二二）の吏部四選の名簿で、三万八千七百七十名の官員のうち二万一千八百八十二名が「恩蔭（朝廷の慶事に官員の子孫が特別に国子監入学を許可され仕官すること）」で選ばれた人で、進士五千三百名は「恩蔭」出身者の四分の一に満たず、しかもそのうちのほとんどは「特奏名（進士に何度も落第した者の中から特別に本科出身の資格を与えるもの）」だった、という。¹⁵科挙を受験し進士となって、政治の中核で活躍しつつ詞詩の制作に励むという、北宋の蘇軾に代表されるような「官僚文人」が成立しづらい状況が、南宋にはあった。

もともと饗宴の場で演奏される曲の歌辞である詞を、中央政界で活躍する「士大夫」までもが制作するというのは、詞の歴史にとっては発展した形であった。北宋のこうした状況を踏まえた上で、南宋にはそれとは異なるタイ

プの詞人も出現したとして、姜夔のような「非官僚文人」が注目されるわけであるが、では「非官僚文人」は「非士大夫」ということにただちになるのだろうか。雅楽に対して朝廷に意見を述べ、自分の理論に従って歌辞も作って上書する、そこに「知国平天下」の使命感は認められないであろうか。認められるとすれば、姜夔は官僚ではなかったが、「士大夫」としての理念は持ち合わせていた、ということになるであろう。

名の「夔」は、古代の龍に似た一本足の怪物であり、かつ堯舜時代に楽で天下を正した楽官の名前である。姜夔は、名が「夔」であるから、字を「堯章」という。蘇洵の挽詩「至馬塍哭堯章」に、

除却楽書誰殉葬、 楽書を除却して誰か殉葬せん、

一琴一硯一蘭亭。 一琴 一硯 一蘭亭。

とある「楽書」とは『大楽議』のことであり、蘇洵はほかに「春日懷詹梁（春日 詹梁を懐かしむ）」詩で、

前回識得白石生、 前回識り得たり 白石生、

聞韶尽美一夔足。 韶を聞き美を尽くす 一夔足。

と詠んでいる。「韶」は舜が作ったとされる伝説上の楽曲。姜夔が雅楽を正すことによって天下を正そうとする意志を持っていたことを、姜夔の晩年の生活を知る蘇洵は貴重なものとして挽詩にとどめたのだろう。

二、江湖に生きる

では姜夔自身は、自分の暮らしぶりをどのように考えていたのであろうか。

姜夔は早くに父を亡くし、嫁いだ姉を頼って漢陽（今の武漢市）に暮らしながら、時に洞庭湖の周辺や、長江を下って揚州（江蘇省）などを旅しながら青年期を過ごした。三十二歳の時に長沙で蕭德藻と知り合って意気投合し、蕭德藻が任期を終えて故郷の湖州へ帰るのに従い、姜夔も漢陽を離れた。蕭德藻は兄の娘を姜夔に嫁がせ、友人の楊万里を紹介し、楊万里はさらに范成大に姜夔を紹介するという形で、著名な詩人との交遊が始まる。

楊万里の「送姜夔堯章謁石湖先生（姜夔堯章の石湖先生に謁するを送る）」詩に、

吾友夷陵蕭太守、吾が友 夷陵の蕭太守、

逢人説君不離口。人に逢えば君を説いて口を離れず。

袖詩東來謁老夫、詩を袖にし東來して老夫に謁するも、

慚無高価当璠璵。高価の璠璵はんよに当たる無きを慚ず。

翻然却買松江艇、翻然として却って松江の艇を買い、

徑去蘇州參石湖。徑たちに蘇州に去きて石湖に參ぜよ。

とある。蕭德藻が姜夔に惚れ込んで友人の楊万里を紹介し、楊万里は自身では援助する力がないとして范成大への

推薦の詩をくれた。姜夔はこのとき、「次韻誠齋送僕往見石湖長句（誠齋の僕が往きて石湖に見うるを送る長句に次韻す）」詩を楊万里に返した。

楊万里の推薦の詩を持って、姜夔は蘇州で隱居生活を送っていた范成大を訪ねた。淳熙十四年（一一八七）六月四日、姜夔三十三歳、この日は范成大の誕生日であり、姜夔は「石湖仙」という自度曲を作った。

石湖仙 越調 寿石湖居士（石湖居士を寿ぐ）

松江烟浦、是千古三高、游衍佳处。

松江の烟浦、是れ千古の三高、游衍せし佳处。

須信石湖仙、似鴟夷翩然引去。

須らく信ずべし 石湖仙の、鴟夷に似て翩然と引去せしを。

浮雲安在、我自愛綠香紅舞。

浮雲 安にか在る、我 綠香紅舞を自愛す。

容与。

容与たり。

看世間幾度今古。

世間の幾度の今古を看ん。

魯溝旧曾駐馬、為黃花閑吟秀句。

魯溝 旧く曾て馬を駐め、黃花の為に秀句を閑吟す。

見説胡兒、也学綸巾敲雨。

見説く 胡兒も綸巾の雨に敲くを學ると。

玉友金蕉、玉人金縷、緩移箏柱。

玉友と金蕉と、玉人と金縷と、緩やかに箏柱を移す。

聞好語。

好語を聞く。

明年定在槐府。

明年定めて槐府に在らん。

前段は、范成大が「三高」すなわち高潔の士として有名な越の范蠡・晋の張翰・唐の陸龜蒙の祠のある地で、「鷗夷」（范蠡の号）のように悠然と隱居生活をするようになったことを述べ、後段は誕生日の宴の様子を、范成大が金国に使者として赴いた際に金人も范成大の文人たる姿に感化されて頭巾を真似したエピソードをからめながら、豪華で華やかな語句を並べて宴会の盛大さを描写し、最後は、このような人材はいずれまた必要なときには「槐府」（学士院）に用いられるのでしよう、と祝福している。

誕生日を祝う詩や詞については、中原健二氏に「寿詞をめぐって 誕生日と除夜¹⁷」という論考がある。それによれば、誕生日を祝う風習は六朝の頃からあったが、士大夫が誕生日に祝いの宴を開くようになったのは宋代からで、祝いの詩（寿詩）は北宋から盛んに作られ、祝いの詞（寿詞）は南宋になって盛んになった。中原氏は、「宋代に至って頌寿の宴が士大夫間で習慣として確立されると、詞は実際にメロディーに乗せて歌唱され得たために、頌寿の宴に最も相応しい文学形式と認識されたであろうことは想像に難くない」という。また、寿詩と寿詞を多作した詩人（詞人）を挙げ、「寿詞を多作したのはほとんど詞の非専門家であり、……寿詞が寿詩の延長線上に生まれたことを示している」と指摘する。

中原氏はまた、当時は年齢を数え年で数えていて、人が一つ年を取るのには誕生日ではなく正月一日だったが、南宋になると誕生日で満年齢を数える意識も出てきているようだ、という指摘もしている。姜夔の「石湖仙」は誕生日のほう、しかも単なる寿詞ではなく、自分で作曲した詞を贈っているところが、特異である。

范成大は姜夔より三十歳ほど年長で、紹熙四年（一一九三）に范成大が亡くなるまで数年間、交遊が続いた。その間、紹熙二年（一一九一）、姜夔三十七歳の時には、冬に雪の中を蘇州まで范成を訪ね、一ヶ月ほど逗留した。「雪中訪石湖（雪中 石湖を訪ぬ）」詩、「玉梅令」詞、「暗香」詞（自度曲）、「疏影」詞（自度曲）を作り、歌の上

手な家妓小紅を贈られた。除夜、范成大と別れて、「除夜婦君溪（除夜 君溪に帰る）」十絶を作る。「暗香」の詞序に、

辛亥之冬、予載雪詣石湖。止既月、授簡索句、且徵新声、作此兩曲。石湖把玩不已、使工妓隸習之、音節諧婉、乃名之曰「暗香」「疏影」。

辛亥の冬、雪の中、石湖を訪ねた。一ヶ月逗留し、紙を渡され詩句を作り、また新しい曲を作るよう求められた。そうして出来たのが、この二曲である。石湖は称賛してやまず、家妓に練習させた。音節は調和して柔らかく、「暗香」「疏影」と名づけた。

とあり、この年の冬のようにすが記されている。これはたいへん有名な、風流なエピソードであり、「暗香」「疏影」は姜夔の代表作と言えるだろう。

「玉梅令」は、詞序によれば范成大が作った曲で、それに詞を填めるよう范成大が要望した、という。

石湖家自制此声、未有語実之、命予作。石湖宅南、隔河有圃曰苑村、梅開雪落、竹院深靜、而石湖畏寒不出、故戲及之。

石湖の家でこのメロディを作曲したが、まだ歌辞を当てていなかったもので、私に命じて作らせた。石湖の邸宅の南に、河をへだてて田園があり苑村といった。梅が咲き、そこへ雪が降り、竹のある庭は静かであるが、石湖が寒がって出なかったので、戯れにそれを詠んだ。

范成大は政界を病で引退した後、故郷の蘇州にある石湖（蘇州の西南にあり太湖に通じる）で隠居した。「畏寒不出」も、病身であったからであろう。梅が好きで、庭の三分の一は梅の樹だったという。「暗香」「疏影」「玉梅令」とともに、梅を詠んだ詞である。

「玉梅令」は、詞序に「石湖」ではなく「石湖家」とあることから、范成大自身が作曲したのではなく、家で抱えている楽人に作曲させたのかも知れない。

范成大と音楽に関するエピソードは、「醉吟商小品」の詞序にも残されている。紹熙二年（一一九一）の初夏、すなわち冬に雪をおして石湖を訪ねるより半年前のことであるが、金陵（南京）で楊万里に会った。その時に作った自度曲「醉吟商小品」の詞序に云う、

石湖老人謂予云、「琵琶有四曲、今不伝矣。曰瀟索（一曰瀟弦）梁州、軋関緑腰、醉吟商湖渭州、歴弦薄媚也。」予每念之。辛亥之夏、予謁楊廷秀丈於金陵邸中、遇琵琶工解作醉吟商湖渭州、因求得品弦法、訳成此譜、実双声耳。

石湖老人が私に、「琵琶に四曲、いまに伝わらないものがある。瀟索（瀟弦）梁州、軋関緑腰、醉吟商湖渭州、歴弦薄媚である」と言ったことがある。私はずっとこのことを考えていた。辛亥（紹熙二年）の夏、楊廷秀さま（廷秀は楊万里の字）の金陵のお屋敷で、「醉吟商湖渭州」を解する琵琶工に遭った。そこで品弦法を求め、この譜面に訳した。実は双声調であった。

楊万里のところで琵琶工に会って「醉吟商小品」を作ったのが紹熙二年（一一九一）の初夏で、それ以前に范成

大から琵琶の四曲の話を書いて心に残っていたのであるから、最初に誕生祝いの宴で会った時に出た話題かも知れない。そこは想像の域を出ないが、「胡渭州」は唐の教坊曲。琵琶の楽工で演奏できる者に会ったので、「品弦法」(演奏法)から「訳成此譜」とある。「此譜」は残されていないが、琵琶譜であろうか。「品」は琵琶の面についているフレット。

敦煌莫高窟から発見された唐代の文書の中に楽譜があり、それが琵琶譜であるとして研究が始まったのは、十九世紀である。琵琶は西域から伝来した楽器で、唐代燕楽の音楽理論の基礎となる。姜夔が琵琶についてどれほどの関心があったのか分らないが、唐代の曲には関心があった。范成大を訪問するよりもさらに前、漢陽にいた青年時代、長沙へ遊びに行った時に、楽工から「商調霓裳曲」十八闋を得たとして、「霓裳中序第一」という詞を作っている。詞序に云う、

丙午歲、留長沙、登祝融、因得其祠神之曲、曰黃帝塩、蘇合香。又於樂工故書中得商調霓裳曲十八闋、皆虛譜無詞。按沈氏樂律「霓裳道調」、此乃商調、樂天詩云「散序六闋」、此特兩闋。未知孰是。然音節閑雅、不類今曲。予不暇尽作、作中序一闋伝於世。予方羈遊、感此古音、不自知其詞之怨抑也。

丙午の歲(淳熙十三年=一一八六年)、長沙に留まって、祝融峰に登り、その祠神の曲を得た。「黃帝塩」「蘇合香」という。また樂工の旧書の中から「商調霓裳曲」十八闋を得た。どれも譜だけで歌辭がなかった。沈氏(沈括)の(「夢溪筆談」中の)「樂律」には「霓裳道調」とあるが、これは商調である。白樂天の詩(「和元微之霓裳羽衣歌」)に「散序六闋」というが、これは二闋しかない。同じものかどうかは分らない。だが音節は閑雅で、今曲にはない類のものである。私は全曲を作る余裕がないので、中序一闋を作って世に伝えよう。

ちようど旅先でこの古音に感じたので、歌辞は自然と憂鬱な感じになった。

白居易の「長恨歌」に登場する有名な「霓裳羽衣曲」の音楽的考証はいま措くが、長沙では、後に楊万里や范成大を紹介してくれる蕭德藻と出会って、客となっていた。この年、姜夔は正月から半年ほど長沙にいて、詩詞や詩論（『詩説』一卷）を作っている。祝融峰に登ったのは秋のこと。「故書」を持っていた「楽工」は、蕭德藻の家妓であろうか。

長沙の蕭德藻のもとには姜夔の他にも、いまとなつては名前しか伝わらない文人や、蕭德藻の親戚筋も集まって、風雅な遊びをしていた。「湘月」詞の序に云う、

長溪楊声伯典長沙楫棹、居瀨湘江。窓間所見、如燕公・郭熙画図、卧起幽適。丙午七月既望、声伯約予与趙景魯、景望、蕭和父、裕父、時父、恭父大舟浮湘、放乎中流。山水空寒、煙月交映、凄然其為秋也。坐客皆小冠練服、或弹琴、或浩歌、或自酌、或援筆搜句。予度此曲、即「念奴嬌」之鬲指声也、於双調中吹之。鬲指亦謂之過腔、見晁無咎集。凡能吹竹者、便能過腔也。

長溪（福建省霞浦南）の楊声伯（不詳）が長沙の楫棹（船の航運）を管轄する役職について、湘江のそばに住んだ。窓から見える風景は、まるで燕公（宋代の画家燕文貴か燕肅？）や郭熙（五代北宋の山水画家）の絵画のようで、優雅で閑静な日々である。丙午（淳熙十三年）の七月既望（望月の翌日）、声伯が私と趙景魯や景望（ともに不詳）、蕭和父・裕父・時父・恭父（不詳。蕭德藻の子や甥）と約束して湘江に大きな船を浮かべ、江の中央まで進んだ。山水はひっそりと冷たく、靄にけふる月が映え、物寂しい秋である。座上の客人はみな

質素な服装（小さな帽子と麻の服）で、琴を弾いたり、高歌したり、自分で酌をして酒を飲んだり、また筆をとって詩句をひねった。私はこの曲を作曲した。「念奴嬌」の鬲指声であり、双調で吹く。「鬲指」は「過腔」とも言い、晁補之（一〇五三―一一一〇、字は無咎、黄庭堅らとともに蘇門四学士と呼ばれた）の集に見える。管竹（簫や笛）を吹く者なら誰でも、「過腔」はできるのである。

「鬲指」は簫や笛の技法で、孔の押さえ方を変えることで音程を変える。姜夔は「過垂虹」詩にもあったように、簫を吹いた。

いまいくつか例を挙げたように、姜夔は音楽に詳しく、琵琶や簫の演奏法にも習熟していたし、自分でも演奏した。それは「坐客は皆な小冠練服、或いは琴を弾き、或いは浩歌し、或いは自酌し、或いは筆を援り句を搜す」という文人の集いの中で発揮されたものであり、唐の教坊曲や「霓裳羽衣曲」について議論することもできた。その点が貴重なのであり、音楽専門の楽工並みの技巧があったからものではやされた、ということではない。少なくとも姜夔自身は、そう自負していた。後に「自述」で、

参政范公以為翰墨人品、皆似晋宋之雅士。

参政の范公（范成大）は、文章書画も人品も晋宋の雅士のようだ、と言った。

と述懐している。

紹熙三年（一一九二）、三十八歳の時に蕭德藻が病気で湖州を離れ、その翌年に范成大も卒した後、紹熙五年

(一一九四) から十年間ほど、姜夔は張鑑の援助を得て、杭州西湖の孤山で暮らした。この晩年の十年間は、著述も充実していて、「大楽議」を上書したり、詞集を刊行したりした。¹⁵⁾ 友人の陳造(一一三三〜一二〇三)に「次姜堯章餞徐南卿韻二首」其一で、

姜郎未仕不求田、姜郎 未だ仕えず 田を求めず、

倚頼生涯九万箋。 倚頼し生涯 九万箋。

と詠われる生活は、この頃であろうか。しかし張鑑が亡くなるや、たちまち生活の心配をされるような心もない面もあった。姜夔と同じく張鑑の家に出入りしていた蘇洵は、「張平父逝後寄堯章(張平父逝きし後、堯章に寄す)」詩で云う、

入門回首事如麻、 門を入りて首を回らせば 事 麻の如し、

豈意銘旌落主家。 豈に意わん 銘旌 主家に落つると。

有夢合尋苕水路、 合い尋ぬる夢有り 苕水の路を、

何心更種馬塍花。 何の心でか更に種えん 馬塍の花。

十年知遇分生死、 十年知遇するも生死を分かち、

八口飢寒足嘆嗟。 八口飢寒して嘆嗟足れり。

我亦此公門下客、 我も亦た此の公 門下の客、

只今垂涙過京華。只、だ今は涙を垂れて京華を過ぐ。

「銘旌」は柩の前に立てる死者の官職や姓名を記した旗。

張鑑を失ったことは姜夔にとつても大きな打撃であり、「自述」はその当時のやや屈折した自意識をありのままに、自らの生涯を振り返ったものである。

某早孤不振、幸不墜先人之緒業、少日奔走、凡世之所謂名公鉅儒、皆嘗受其知矣。

私は幼い頃に父を亡くして不遇であったが、幸いにも祖先の遺業を失墜させることはなかった。若い頃から各地を奔走して、およそ世間で名だたる高貴な方々、大学者は、みな知遇を得ることができた。

として、范成大・楊万里・蕭德藻のほか、朱熹・京鐘・謝深甫・辛棄疾らの名前を次々に挙げ、当時の名士たちがそれぞれに自分の才能を愛惜して交遊してくれたことを言う。だが張鑑との交流のとりわけ深く、その張鑑を失った哀しみを述べる。

嗟乎、四海之内、知己者不為少矣、而未有能振之於婁困無聊之地者。旧所依倚、惟有張兄平甫、其人甚賢。十年相处、情甚骨肉。

ああ、この世で自分を分かってくれる人は、少なくともなかった。だが困窮して無聊をかこつ窮地を救ってくれる人はいなかった。ずっと頼りにしていたのは、張兄平甫（張鑑）だけである。その人物たるや甚だ賢にして、

十年ものつきあい、情はまことに骨肉同然だった。

と。では「己を知る」当時の名士たちは、姜夔をどのように評価していたのか。評価している、と姜夔は思っていたのか。

内翰梁公於某為鄉曲、愛其詩似唐人、謂長短句妙天下。樞使鄭公愛其文、使坐上為之、因擊節稱賞。参政范公以為翰墨人品、皆似晉、宋之雅士。待制楊公以為於文無所不工、甚似陸天隨、於是為忘年友。復州蕭公、世所謂千巖先生者也、以為四十年作詩、始得此友。待制朱公既愛其文、又愛其深於礼樂。丞相京公不特稱其礼樂之書、又愛其駢儷之文。丞相謝公愛其樂書、使次子來謁焉。稼軒辛公、深服其長短句。……

翰林院の梁公（不詳）は私を同郷として、詩が唐人のようだと愛し、長短句は天下に妙たりとした。樞密使の鄭公（鄭僑）は文を愛し、上席にして手をたたいて称賛した。参政（宰相の副職）の范公（范成大）は文辞と人品いずれも晋宋の雅士のようだと愛した。待制の楊公（楊万里）は文すべて巧みで陸天隨（陸龜蒙）によく似ているとして、年齢を越えた友人となった。復州の蕭公（蕭德藻）、世に千巖先生と呼ばれている方は、四十年のあいだ詩を作って、はじめてこの友を得た、と言った。待制の朱公（朱熹）は文を愛し、礼楽に造詣の深いことを愛した。丞相の京公（京鏜）は礼楽の書を称賛しただけでなく、駢儷の文章も愛した。丞相の謝公（謝深甫）は音楽書を愛し、次子をよこして会いたいと言った。稼軒辛公（辛棄疾）は、長短句に心服した。

……

まだ続くが、音楽に関しては、「礼楽に詳しい」ことが認められたことを誇りに思っている様子がかがえる。
蘇洵が挽詩「至馬塋哭堯章」で、

除却楽書誰殉葬、 楽書を除却して誰か殉葬せん、
一琴一硯一蘭亭。 一琴 一硯 一蘭亭。

と姜夔の生涯を総括したのは、深く姜夔を理解した友人ならではであったと言えよう。
姜夔自身は、「自題画像」で自らを次のように描写する。

鶴竚如煙羽扇風、 鶴竚 煙の如し 羽扇の風、
寄情芳草綠陰中。 情を芳草綠陰の中に寄す。
黒頭辦了人間事、 黒頭 辦了す 人間の事、
來看凌霜數点紅。 来たりて凌霜の数点の紅を見る。

鶴の羽で織った上衣は煙のように羽扇の風にあおられ、芳草や緑陰を見て思いにふける。髪はまだ黒々としているが世間の俗事はやりおえた。霜にあらがう赤い花（木芙蓉のこと）がいくつか咲いているのを眺める。つまり、俗事に煩わされることもあつたけれども、それはそれで処理して、悠然と高潔でいる、それが自分だ、というのである。南宋の白良玉（寧宗の時代の画院の画家）の画が後に石に刻され、その拓本が伝わっている。¹⁹⁾

三、文芸と「韻」

姜夔の暮らしぶりについて、陳郁『藏一話腴』内編卷下には、次のように云う、

作詩作文非多歷貧愁者決不入聖処。……白石道人姜堯章、氣貌若不勝衣、而筆力足以扛百斛之鼎、家無立錫、而一飯未嘗無食客。凶史翰墨之藏、充棟汗牛。襟期灑落、如晋宋間人。意到語工、不期於高遠而自高遠。詩を作り、文を作るには、貧窮や愁いをたくさん経験しなければ、玄妙で超越した域に到達することはできない。……白石道人姜堯章は、風貌は衣服の重さにも耐えられないほど弱々しく見えたが、筆力は百斛の鼎を持ち上げられるほど強かった。家は立錫の余地もないほど狭かったが、客が来て食事でもてなさないようなことは一食たりともなかった。凶書・史籍・書画のコレクションは汗牛充棟であり、心もちが洒脱で晋宋の時代の人のようであった。意は周到で語は巧み、高遠を期せずして高遠になった。

張鑑は友人も羨むような十分な援助をしてくれたが、姜夔は書画骨董にお金を注ぎ込んで、生活には無頓着だったようである。そのような態度が、おのずと作風にも表れて、「清空」と評されるのである。

「清空」というのは文芸評論の用語の一つで、南宋・張炎の『詞源』でもっとも有名な用語である。²⁰⁾「清」は魏晋南北朝に流行した「清談」のように、世俗を離れた心持ちや態度であり、「空」も道教や禪を背景とする清浄を言う。

詞要清空、不要質実。清空則古雅峭拔、質実則凝澁晦昧。姜白石詞如野雲孤飛、去留無迹。吳夢窓詞如七宝樓台、炫人眼目、拆碎下來、不成片段、此清空質実之說。

詞は清空であるべきで、質実であつてはならない。清空であると、古風で雅趣があり高く抜きん出る。質実であると、流れが滞つてギクシヤクし晦澁になる。姜白石の詞は、野にぽつんと浮かぶ雲が、行くも留まるも痕跡を残さないようだ。吳夢窓の詞は、七宝の高殿のように人目を眩ませるが、砕けてしまふと体を成さない。これが清空質実の説である。

「野雲孤飛、去留無迹」は、姜夔の詞風を表すものとして、今日でもよく引用される評語である。「雲飛」は、道教では昇天羽化すること。「野雲」は唐の韋莊（一説に僧応物）の「龍潭」詩に、「激石懸流雪滿灣、九龍潜処野雲閑（激石懸流して雪灣に滿ち、九龍潜む処 野雲閑かなり）」の句があり、「九龍」とは瑞祥、また神仙の乗る神獸「野雲飛」には、梅堯臣「弔瑞新和尚」詩に「已隨原火尽、空見野雲飛（已に原火尽くるに隨い、空しく野雲飛ぶを見る）」の句もある。「去留」は生死のことを言い、魏の嵇康「琴賦」に「齊万物兮超自得、委性命兮任去留（万物を平等に見て超然と大道を自得し、わが身を委ねて天命に任せる）」、晋の陶潜「帰去來兮辭」に「寓形宇内復幾時、曷不委心任去留（形を宇内に寓する復た幾時ぞ、曷ぞ心を委ねて去留に任せざる）」とある。

「野雲孤飛、去留無迹」は、風景とそこから喚起される心象を述べているようでありながら、随所に道家的な思想への傾斜が見られる。姜夔は号を白石道人としていることから分かるように、道家的な世界に若い頃から興味を持っていた。そこを斟酌した評語であると言えるかも知れない。

張炎（一二四八―一三二〇）、字は叔夏、号は玉田）は、張鑑の兄弟張鑑（一一五三―？、字は功甫、時可）の曾

孫。姜夔は張鎡とも交遊があり、慶元六年（一一〇〇）、四十六歳の秋、杭州北城南湖の張鎡の邸宅落成を祝つて「喜遷鶯慢」詞を作り、応酬している。「喜遷鶯慢」の詞序に「功夫新第落成」とある。張鎡は楊万里、陸游に詩を学んで唱和の作も多く、『南湖集』二十五巻があつたが、散逸した。「喜遷鶯慢」詞に云う、

玉珂朱組、又占了道人、林下真趣。

玉珂朱組、又た占めたりぬ道人、林下の真趣を。

窓戸新成、青紅猶潤、双燕為君胥宇。

窓戸新たに成り、青紅猶お潤い、双燕君が為に胥宇す。

秦淮貴人宅第、問誰記六朝歌舞。

秦淮の貴人の宅第、誰か問う 六朝の歌舞を記せしと。

綵付与、在柳橋花館、玲瓏深处。

綵べて付与す、柳橋花館、玲瓏深き処に在るに。

居士、閑記取。

居士、閑かに記取す。

高臥未成、且種松千樹。

高臥未だ成らず、且く松千樹を種えん。

覓句堂深、写經窓靜、他日任聽風雨。

句を堂の深きに覓め、經を窓の靜かなるに写し、他日風雨を聴くに任す。

列仙更教誰做、一院双成儔侶。

列仙更に誰にか做さしめん、一院双成の儔侶に。

世間住、且休將鷄犬、雲中飛去。

世間に住み、且く鷄犬を將て、雲中に飛去せしむるを休めよ。

「玉珂朱組」は高位高官に在つたこと。「居士」は張鎡、約齋居士と号した。「高臥」は隱居したこと。「松千樹」とあるのは、庭に松二百本を植えたこと。園中には「写經寮」があつた。「双成」は古代の伝説の仙女。西王母に侍し、宅中で丹藥を作り、完成すると鶴に乗つて昇天した。ここでは張鎡の歌妓のこと。張鎡は宴たけなわになる

と、家妓に自製曲を歌わせたという。最後の句は、淮南王が道を学び、天下の道士を集めて奇方異術を競わせ、ついに道を得て一家を挙げて昇天したので、犬も天上で吠え、鶏も雲中で鳴いた故事。張鎡の邸宅がすばらしく、そこに大勢の人士が集められ、高雅で脱俗した様子を詠う。

張鎡は方回のいわゆる「望門」の人、ということになる。方回は「江湖の遊士」が「往往にして士大夫を雌黄し、口吻畏るべく、望門の倒屣するに至る」と皮肉っぽく述べたが、戴表元は「送張叔夏西遊序（張叔夏の西に遊ぶを送る序）」で、

叔夏之先世高曾祖父、皆鐘鳴鼎食、江湖高才詞客姜夔堯章、孫季蕃花翁之徒、往往出入館穀其門、千金之裝、列駟之聘、談笑得之、不以為異。

叔夏（張炎）の先代、高祖父や曾祖父は、みな贅沢な暮らしで、江湖の高才な詞客姜夔堯章、孫季蕃花翁らにはしばしば家に入入りして、宿泊したり食事をしたりした。千金に値する衣装や、車馬で運ぶほどの宝物が、談笑する間に手に入るが、ことさら特別であるとも思われなかった。

と記している。張宏生はこの記事を挙げて、「姜夔が受けた高い評価を描いている」とするが、この文の前後に、張炎がもとはこれほどの名門に生まれて貴公子として育てられながら、南宋の滅亡により旅費にも困る状況であった、とあることは注意していいかも知れない。戴表元（一一二四～一三二〇）は、南宋の度宗咸淳五年（一二六九）に太学に入學し、七年に進士に登第して建康府教授となったが、一二七九年に南宋が元によって亡んだため、私的に学生を教え、文を売って自給した、という人である。「送張叔夏西遊序」に続けて云う、

余周流授徒、適与相值、問叔夏何以去來道途若是不憚煩耶。叔夏曰、「不然、吾之來、本投所賢、賢者貧、依所知、知者死、雖少有遇而無以寧吾居、吾不得已違之、吾豈樂為此哉。」語竟、意色不能無沮然。少焉飲酣氣張、取平生所自為樂府詞、自歌之。……嗟乎。士固復有家世材華如叔夏而窮甚於此者乎。

私は四方を流転して弟子を教育しており、たまたま叔夏に出会ったので、このように周遊する煩わしさはないのか尋ねた。すると「いいえ、本来は賢人を頼りたいと思っていますが、賢人は貧しいものですし、知己を頼りたいと思いますが、知己は亡くなってしまいました。いささか知遇を得る機会はあっても、安住するところはありません。私も仕方なく旅立つのであって、望んでやっていることではないのです」と。話し終わると、しょんぼりした様子であった。しばらくして、酒を飲んで憂さが晴れたのか、自分が作った詞を取り出して、歌い始めた。……ああ、張叔夏のような名家に生まれた士人であっても、このように貧窮してしまうのか。

戴表元が姜夔とともに名前を挙げていた「孫季蕃花翁」は、孫惟信（一一七九—一二四三、字は季蕃、号は花翁）のこと。方回も「錢塘湖山に此に曹什伯、群を為す」の例として、挙げていた。婺州（浙江省金華）に暮らした後、西湖に隠居した。趙師秀、劉克莊らと交遊があり、劉克莊が「孫花翁墓誌銘」を書いている。いま詩は九首しか伝わらないが、「四十九歳自寿」の序のある詞（失調名）がある。自分の誕生日を祝う「自寿詞」で、詞中に、

百屋堆錢都不要。百屋堆錢は都れも要らず、

更不要、袞衣茸纛。更らに要らず、袞衣・茸纛。

とある。援助を受ける側が言うことではないような気もするが、援助を受けながらも、あるいは受けているからなお、「往往にして士大夫を雌黄し、口吻畏るべし」という屈折した態度になるのかも知れない。

戴表元は張鑑が当時行なっていた文人の集いを、「牡丹宴席詩」序で次のように描写している。

循王孫張功父使君以好客聞天下。當是時、遇佳風日、花時月夕、功父必開玉照堂置酒樂客。其客廬陵楊廷秀、山陰陸務觀、浮梁姜堯章之徒以十數至、輒飲飲浩歌、窮月夜忘去。明日醉中唱酬詩或樂府詞、累累伝都下、都下人門鈔戶誦、以為盛事。

循王の孫である張功父さま（張鑑）は客好きで天下に聞こえていた。その日は天気もよく、花咲き月影さやか、玉照堂で宴を開いて、酒酌み交わし客人と楽しんだ。客には廬陵の楊廷秀（楊万里）、山陰の陸務観（陸游）、浮梁の姜堯章ら十数人がいて、酒盃を傾け高歌し、月を愛でて夜がふけるのも忘れた。翌日には酔ったまま詩や樂府詞を応酬し、続々と都下に伝わり、都の人たちはこぞって写しては読み、にぎやかであった。

張炎の父の張枢（字は斗南、号は窗雲、寄閑）は西湖吟社を結成し、張鑑が造った絵幅堂に吟社の人々が集うための「吟台」を建造して、詞の音律面の研究を中心に活動していた。張炎が『詞源』を著したのは晩年で、七十歳を越えていた。若い頃には父が主催する吟社の集いに参加したこともあり（『詞源』に見える）、「江湖の遊士」をもてなす側であったが、江湖を周遊する姜夔と同じ境遇になった。姜夔は、范成大の誕生日祝いの「石湖仙」然り、この「喜遷鶯慢」然り、またこの二作以外にも、詩詞を贈った代償として少くない金銭等の援助を受けた。にも関わらず、飄逸としていた。張炎は姜夔と同じ境遇になったからこそ、姜夔の超俗的な作風に惹かれたのかも知れ

ない。もつとも、彼ら「望門」の没落は亡国に瀕した一時的なもので、混乱が収まると再び文人を集めて「曲水の宴」を開くなどした。⁽²³⁾ただし、「曲水の宴」自体が王羲之の当時、政治的に非常に困難な状況のもとで開かれたもので、暢気な花見の宴会などではなかったことは、付け加えておいていいだろう。

張炎が詞の境地について「清空則古雅峭拔、質実則凝澁晦昧」とした背景には、長く伝統的な文芸批評の歴史がある。この点については、松尾肇子氏の一連の論考⁽²⁴⁾がある。たとえば、「古雅」は文学の批評用語だけでなく書論・画論用語でもあり、『詞源』とほぼ同じ時期に著された『楽府指迷』では音楽面での評価に使われている。「峭拔」は、もとは山が険しく高いことで、書画の評によく使われる。「質実」は人物を批評して、飾り気のない人柄とその誠実さを指す誉め言葉であったが、姜夔は『統書譜』⁽²⁵⁾で（同じ人の書を真似ても学習する側の個性によって違いが出てきて）「質直者、則徑佻不適（真正直な人は、率直すぎて美しさに乏しい）」と貶辞として使っている。「晦昧」は自然の風景の暗さを言うのが原義だが、早くから人の愚昧なことを評する言葉として使われた、等である。「凝澁」は熟した用例が見つからず、「澁」は『文鏡秘府論』に「澁阻」があり、また『碧鷄漫志』に「僻澁」があるとのことだが、医学の分野では「氣血凝澁」という用例はいくつも見つかる。姜夔の『統書譜』には「血脈」の項もあり、書論とやはり関係するのではないだろうか。近代の許宝衡は「喝火令」詞で、「箏弦凝澁不成彈（箏弦凝澁して弾を成さず）」と、音楽に関連して「凝澁」の語を使っている。

姜夔は、詩詞・書・音楽にすぐれ、それぞれに理論書も著した。『詩説』『統書譜』『絳帖平』（法帖譜）が伝わっており、散逸したものに『琴書』『琴瑟考古図』『集古印譜』などがある。松尾肇子氏は、「総じて姜夔の学問は、詩論においても書論においても、北宋の蘇軾と蘇門の四学士を中心とした先行の研究成果を広く吸収し、自らの創作経験を加えて再構築するもの」であり、「姜夔の書論と詩論とは、『意』『血脈貫穿』『含蓄』などの重要な用語

が共通する。音楽論は、姜夔の使用した用語だけに絞るとほとんど孤立しているが、書画論全体に拡大すればその限りではない⁽²⁶⁾、と指摘する。

姜夔が後に書物にまとめることになるこれら文芸全般に対する理論の萌芽は、漢陽時代に見られる。それについては別稿⁽²⁷⁾で論じた。姜夔の詩論や書論についても、その中で触れた。また音楽面については、琴律を中心に理論が構築されていることをこれまでいくつかの論考で明らかにし、同時に張炎『詞源』の音楽部分に姜夔の理論が継承されていることも論じてきた⁽²⁸⁾。

姜夔の詩論には、「氣象」「体面」「血脈」「韻度」の四つの要素が見える⁽²⁹⁾。袁向彤『姜夔与宋韻研究』によれば、「韻」とはもともと琴の韻について使われていた用語である。琴は古くからあった楽器で、戦国時代の『尹文子』に「韻商而含徵（韻は商にして徵を含む）」とある（「商」「徵」とも音の高さ）のが最も古い用例で、後漢の蔡邕『琴賦』に「繁弦既抑、雅韻乃揚（かき鳴らした弦が静かになると雅韻が響く）」、魏の曹植『白鶴賦』に「聆雅琴之清韻、記六翻之末流（雅琴の清韻を聴いて、六翻の末流を記す）」、嵇康『琴賦』に「改韻易調、奇弄乃筭（韻を改め転調し、めずらしい曲を弾き始める）」などが音楽の用例として続く。この頃、琴の演奏法と技巧が成熟した。魏晋の時代には、人物批評に「韻」が使われるようになり、さらに書画の批評にも使われるようになり、文学の批評にも拡大した。南斉・謝赫『古画品録』『六法』の第一が「氣韻連綿」であり、梁・劉勰『文心雕龍』では「韻」が三十数回使われている。時代が下って五代になると、画家の荆浩『歴代名画記』が、山水画に「氣韻」の理論を導入するに至った⁽³⁰⁾。

つまり、「韻」は琴の旋律について述べる言葉だったが、それが琴を弾く人物についての評語となり、さらに書画の批評にも使われ、その後、文学の批評に使われるようになった。仏教の伝来とともに中国語の音韻について関

心が高まり、詩の韻律の研究が進んで、古詩から近体詩への過渡期であったのがこの時代であり、文学への「韻」の応用が最後であり、「韻」は初め音楽の用語であった。

琴が楽器の中で特別な位置を占めていることは以前論じたので繰り返さないが、後漢の蔡邕のエピソード（『後漢書』蔡邕伝に見える）だけ引いておこう。蔡邕が酒食に招かれて隣人を訪ねたところ、屏の中から聞こえてきた琴の音に殺気を感じて、門から入らずに引き返した。驚いた主人が調べると、琴を弾いていた者が、「鳴いている蟬を螞螂が狙っているのが目に入り、弾きながら螞螂が蟬を獲り逃がすのではないかと心がざわついた、それが音に表れたのであろうか」と答えた。それを聞いて蔡邕はにっこり笑ったという。

蔡邕は熹平石経を建てた学者であり、建安文学に影響を与えた文章家であり、また儒学の大家であり、「蔡氏五弄」と呼ばれる琴曲を伝えた琴の名手であったが、書の方面でも大きな影響を与えた。大野修作『書論と中国文学』⁽²¹⁾によれば、蔡邕は梁の庾肩吾『書品』ではまったく批評外であったが、初唐の李嗣真『書後品』、盛唐の『書断』で、格段に地位があがった。

『書断』に至って、蔡邕の重みは急激に増しているものであり、蔡邕を抜きにしては書論の体系化は不可能であったともいえる。いわば王羲之を中心として定立した品第法が、書法史全体を見通すような体系化をめざした時、王羲之では包摂できずに、蔡邕にとってかわられたといえるであろう。⁽²²⁾

だが姜夔は終生、王羲之の「蘭亭序」に学んだ。嘉泰三年（一二〇三）、四十九歳の時、「蘭亭跋」に、「二十余年、蘭亭を習う」と記している。蘇洵「至馬慙哭堯章」詩の、

除却楽書誰殉葬、 楽書を除却して誰か殉葬せん、

一琴一硯一蘭亭。 一琴 一硯 一蘭亭。

楽書と琴のほかに、硯と「蘭亭序」、これが姜夔の生涯を総括する要素で、姜夔は定武本「蘭亭」を愛蔵していた。この跋を書いた年、王羲之の子の王献之が書いたとされる「保母志」が発見され、姜夔は跋を書いた。端正な小楷で、銘文についての考証を記したものである。近年、その全文が影印³³で出版された。姜夔の学者としての一面が垣間見えるのではないかと思われるが、本稿では措く。

ではなぜ琴の名手蔡邕ではなく王羲之なのか、「蘭亭序」なのか。琴から始まった「韻」が、人物や書画の評語にも応用されるようになったのが六朝の頃であり、姜夔が范成大に「晋宋の雅士に似たり」と評されたことを誇りとしていたこと、さらには王羲之の蘭亭の集いが単なる花見の宴ではなく、当時王羲之たちが置かれていた政治的苦境と姜夔が張家（張鑑や張鉉）に出入りしていた頃の南宋社会の苦境が重なること等を考えると、文人にとつての雅集の位置づけにおいて姜夔の平生の事跡についても考えるべきではないかと思われるが、これも今後の課題としたい。

おわりに

詞は燕楽から発展したとされるが、隋唐の燕楽の音楽理論は琵琶に依拠しており、琵琶を代表とする西域由来の楽器の担い手は楽人（楽工や妓女）であった。宋代になって宰相クラスの官僚文人まで詞作をするようになって、

北宋の詞は「士大夫の詞」と言われるようになった。南宋になると社会状況の変化もあり、官職は低い（または無い）ながらも詞を作る人々が現れた。詩においては彼らの一部は陳起の『江湖集』シリーズに入れられていることから、江湖派や江湖詩人としてグループ化されることがあり、姜夔もその一員とみなされたり、または江湖派の前人とみなされている。しかし姜夔はその飄逸な態度と「清空」な作風で、晋宋の雅士のようだと評されていた。詩詞文のみならず書と音楽に秀でた「文人」であったが、士大夫としての理念を持っていなかったわけではなかった。姜夔は雅楽について意見を述べ、自分の理論に従って歌辞を作って献上し、また詞にも応用した。とくに「角招」「徵招」の二詞は、北宋徽宗朝に新制された雅楽「大晟楽」をもとに改定したもので、その際に琴を基準に考えている。

なぜ琴なのか。筆者は詞の音楽面への関心から、隋唐の燕楽から宋代の詞楽へ発展するに至って、琵琶にもとづく燕楽理論から琴にもとづく詞楽理論が構築され、張炎『詞源』に継承されていく流れをずっと追ってきたが、これまで琴が伝統的に士大夫の楽器であったから琴を基準にしているのだろうと考えて、個別の詞について論じてきた。しかし今回、姜夔は詩論や書論を北宋の蘇軾や黄庭堅から影響を受け、詩論や書論にも共通する批評用語で音楽についても論じ、「韻」に関してはむしろ琴が先行していたことが明らかになった。

琴に象徴的な中国古代の知識人（士大夫とも文人とも称される）の人格、それが姜夔の場合には、詩詞・書・音楽の面において、理論・実践の両面で体现され、黄庭堅を代表とする先人から受け継ぎ、かつ張炎ら後人に継承されたものであったと言えよう。

- (1) 卒年には諸説あるが、王睿「姜夔卒年新考」(『文学遺産』二〇一〇年第三期)に従い、いま二〇〇八年とする。
- (2) 『白石道人歌曲』六卷、寧宗の嘉泰二年(一二二〇)、雲間の錢希武刻。錢希武の題記があり、淳祐十一年(一二五二)、錢氏家藏本に趙与峯(趙猛頰の父)が後記を書き、これが瑛に渡された。後に陶宗儀がこれを抄し、清代になって世に現れ、広まった。
- (3) 夏承燾『姜白石詞編年箋校』「行実考 (五) 交遊」に、一〇七名が記録されている。上海古籍出版社、一九八一年、二四六～二六六頁。
- (4) ほかに、陳振孫『直齋書録解題』に著録された『白石道人集』三卷(散逸)などがあった。
- (5) 張宏生(保荊佳昭訳)「南宋江湖詩人の生活と文学」、『南宋江湖の詩人たち 中国近世文学の夜明け』所収、勉誠出版、二〇一五年、十四頁、参照。
- (6) 官僚として政治にたずさわりながら文学活動にも従事していた「官僚文人」に対し、もっぱら文筆にたよって生活していた文人。「官途にはほとんど無縁でありながら、文事、詩文のみならず書画音楽などひろく芸術にも精通し、文人という面では通常の官僚文人を超え、いわば純粹文人または專業的文人ともいえるような人々」「文事を以て社会的に華やかに活動する所は隱者とは決定的に異なり、南宋になって初めて生まれた新しい階層」であり、「経済的にいえば豪族や高級官僚に寄食する立場に違いないが、社会的地位は決して低くはなく、官職を有しただけに、高級官僚などとも友人として対等に交遊する」、姜夔はその典型的なタイプとされる。村上哲見『宋詞研究 南宋篇』第一章「総論」、創文社、二〇〇六年、二五～二六頁、参照。
- (7) 張宏生『江湖詩派研究』、中華書局、一九九五年、二〇六頁、および二二一頁。
- (8) 袁向彤『姜夔与宋韻研究』、齊魯書社、二〇〇七年、二二～三一頁、参照。
- (9) 暎風残月会(中原健二氏代表)「姜白石訳注稿(八)」、『中国言語文化研究』第十四号、佛教大学中国言語文化研究会、二〇一四年、四八～四九頁。

- (10) 詞に関連する演奏場面を描いたいくつかの絵画については、拙論『韓熙載夜宴図』の時代と音楽シーン』、『風絮』第七号、宋詞研究会、二〇一一年、一〜四六頁、で論じたことがある。
- (11) 詞と琴については、拙論『南宋の詞学と琴』、『人文科学』第十九号、慶應義塾大学日吉紀要、二〇〇四年、七九〜一三二頁、で論じたことがある。
- (12) 村上哲見「文人・士大夫・読書人」、『未名』第七号、中文研究会、一九八八年初出、後『中国文人論』所収、汲古書院、一九九四年、二二〜五二頁。
- (13) ともに内山精也『南宋江湖の詩人たち 中国近世文学の夜明け』「巻頭言 南宋江湖詩人研究の現在地」に見える。
- (14) 張宏生『江湖詩派研究』第一章「江湖詩派的形成」の「社会的要因」、八〜十頁、参照。
- (15) 郭鋒『南宋江湖詞派研究』、巴蜀書社、二〇〇四年、十頁。
- (16) 范成大『吳船錄』巻上に「六月己巳朔、壬申泊青城山、始生之辰也」と自分で記している。夏承燾『姜白石詞編年箋校』、「石湖仙」の注、二四頁、参照。周汝昌氏の指摘による、という。
- (17) 中原健二「寿詞をめぐって 誕生日と除夜」、『中国学志』願号、二〇一二年、一五〜五六頁。
- (18) 拙論『惟だ恍として夢の如し』——姜白石の生涯と創作活動』、『中国学芸聚華』所収、白帝社、二〇一二年、八七〜一〇七頁、参照。
- (19) 周錚『姜夔画像雑考』、『文物』一九八七年第四期、参照。
- (20) 訳と注は、詞源研究会『宋代の詞論——張炎「詞源」——』、中国書店、二〇〇四年、一一〜一九頁、参照。
- (21) 文芸批評における「清空」「質実」については、松尾肇子『詞論の成立と発展——張炎を中心として』、第三章「清空の説の検討」、東方書店、二〇〇八年、参照。
- (22) 張宏生（保荊佳昭訳）『南宋江湖詩人の生活と文学』、十七頁。
- (23) 松尾肇子『詞論の成立と発展——張炎を中心として』、一三〇頁に指摘がある。
- (24) 詞源研究会として『詞源』下巻に訳注をつけた『宋代の詞論——張炎「詞源」——』「清空」門の注に散見され、後

- に博士論文にもとづく『詞論の成立と発展——張炎を中心として』第三章「清空説の検討」にまとめられている。
- (25) 『続書譜』には、西林唱一氏の訳注がある。中田勇次郎編『中国書論大系』第六卷「宋3」所収、一九七九年、二五社、二七六～三四七頁。引用部分は、「情性」中に見える、三〇七～三一〇頁、参照。
- (26) 松尾肇子「姜夔の『詩説』と詞論」、および「姜夔の楽論と南宋末の詞楽」、『詞論の成立と発展——張炎を中心として』、十四～二二頁、および一六三～一八五頁。
- (27) 『漢陽時代の姜白石』、『学芸国語国文学』第四十八号、東京学芸大学国語国文学会、二〇一六年三月（掲載予定）。
- (28) 「姜夔『徵招』『角招』詞考」、『東方学』九〇輯、東方学会、一九九五年七月、七七～九〇頁。「姜夔の『凄凉犯』に見る犯調について」、『お茶の水女子大学中国文学会報』二十号、お茶の水女子大学中国文学会、二〇〇一年四月、九〇～一〇四頁。「燕楽二十八調再考」、『お茶の水女子大学中国文学会報』二十二号、お茶の水女子大学中国文学会、二〇〇三年四月、一～十五頁。「南宋の詞学と琴」、『人文科学』第十九号、慶應義塾大学日吉紀要、二〇〇四年五月、七九～一三二頁。「姜夔の楽論における琴楽」、『風絮』二二号、宋詞研究会、二〇〇六年三月、一三三～一四六頁。
- (29) 中田勇次郎『読詞叢考』、創文社、一九九八年、七〇頁に、「およそ詩にはおのずから気象と体面と血脈と韻度とがある。気象は渾厚ならんことを欲する。その欠点は俗におちいることである。体面は宏大ならんことを欲する。その欠点は狂になることである。血脈は貫通していることを欲する。その欠点は露骨になることである。韻度は飄逸ならんことを欲する。その欠点は軽くなることである」とある。
- (30) 袁向彤『姜夔与宋韻研究』、二二～二七頁。
- (31) 大野修作『書論と中国文学』、第一章「蔡邕と南朝・唐の書論家」、研文出版、二〇〇一年、参照。
- (32) 大野修作『書論と中国文学』、三〇九頁。
- (33) 『姜夔王献之保母志跋』、上海書画出版社、二〇一一年。